

巻頭言 「草上の養い」

宇野 元

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ

憩いの水のほとりに伴ひ

魂を生き返らせてくださる。

詩編 23, 1-3

イエスは弟子たちに、皆を組みに分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。
マルコ福音書 6, 39

印象派の画家モネの絵に「草上の昼食」という作品があります。有名なマネの絵に着想を得て描いた作品と言われますが、マネのものよりも自然を感じさせられます。モネが屋外で制作する人だったことが関係していると思います。

森の木漏れ日。若々しい男女のたたずまい。そして前景のくだものや、お皿に盛られた豊かな食物。爽やかな光がふりそそぐ自然の中での楽しい食事！ 絵のなかに入ってお相伴にあずかりたくなります。それとも、私たちも自然に囲まれているのですから、格好の場所をみつけに出かけましょうか。なつかしいバスケットがあれば言うことはないでしょう。

聖書にある「草上の養い」。新鮮な緑の草原。そよ風にゆれていたでしょうか。夕日をあびて、金色に輝いていたでしょうか。あちらこちらに可憐な野の花たちが咲いていたでしょうか。そこに5千人もの人々が招かれています。

手元にあったのは、パンが5つと魚が二匹。しかし、弟子たちにイエスは言われます。人々に与えなさい。——わたしに信頼していなさい。わたしが備える。それを信じていなさい。わたしの言葉を思いめぐらしなさい。パン種が、全体をふくらませるように、人目にとまらないもの、小さく貧しく見えることが、全体をふくらますものとして用いられる！

パンデミックの荒野にあって、イエスは私たちを憩いに導き入れ、養ってくれます。真実な命ある言葉によって。羊飼ひの養いに多くの人と共に招かれています。そのため小さな群れを導いておられます。芦屋教会が、困難な世界の中に、青草の場所として置かれています。